生活造形と生産造形についての一考察

A Study of Industrial Design for Living and Environment

Objects which are produced by industrial means create a modern living environment and an urban environment. People sellect such objects and form a place of living by composing the objects. As a consequence of the IT revolution and other factors, people will begin to look for original design and so production will become diversified. The diversification of production must not confuse the place of living. Public facilities and institutions are shared by various people. Beautiful tools and streets can activate people. The element of beauty is vital for everything, no matter how original the thing is.

野中　壽晴
デザイン学部生産造形学科
Toshiharu NONAKA
Faculty of Design
Department of Industrial Design

1．はじめに

現代の生活はさまざまな工業生産物によって支えられている。個人の使用物から都市環境までその量と種類は膨大である。その蕩尽が現代の課題の一つであることはだれもが認める事実である。量の問題も大きく関わることではあるが、それらが人とどのような在り方で、あるいは関係の仕方で存在しているかという視点も大事である。限定された場であればおなじ量のものであってもその置かれている状態や在り方などによってそこに立ち会う人との関係は明らかに異なる。おなじ目的のためにおなじ機能の道具が使われる場合でも、その性能はもちろんその造形や重さなどによって、あるいは使い手との歴史や心情的つながりの程度によって、その関係は大いに異なったものになる。その関係が自然である場合、それを風土とよんでいいのだと思うが、それが住む人の感性や営みにさまざまに作用するという事実も認めていいだろう。多人数が住めば自分以外の人々もまた関係の対象であることも理解できる。そういう関係の事実が時間の経過の中で増減や変形を経ながらつながってきているのが文化といわれているようである。もしそれが文化だとすれば文化自身は成り行きの塊で量にも蕩尽にも発言権はもっていないように見受けられる。

関係の性格が結果の性格にどうつながっているかはともかく、現代の身辺や環境を構成している生産物の在りようは、それ自身、いわゆる文化との相互作用の結果だが、その量と関係の頻度の多さによって、現代の人や社会の在りように大きく関わっていることもまたまぎれもない事実である。いわゆるデザインの存在理由はその事実に対してあるはずだが、デザインもまた寄る術もなく共に流れている。

今、歴史はIT革命といわれるものの真っただ中にあるといわれるが、それが成熟の域に達したとき、人や社会はどう変わるのか大いに興味がもたれる。すでに始まっているコミュニケーションや生産の仕組みがさらに変わるだろうことは想像しやすいが、そのとき人と人との関係の中身、人とモノとの関係の在り方ははたしてどう変わるのか。人と人との関係はさておき、人とモノとの関係ではやはり知覚が主であることに変わりはないであろう。進化生態学によれば遺伝子の変化には一万年を要するという。どうやら人の今の感覚は当分あてにしていいようである。人とモノとの関係で変わるのは、情報の量とアクセス効率の飛躍的増加、使用という面での固有な関係の深化とそれに並行しての生産への関わりの拡大、高度な技術利用、高度な都市機能の整備などによる共有化部分の増大などではないか。それは一言でいえば、情報化と多様化と共有化の拡大といっていいだろう。それは明らかにITが押し進めるモノの在りようの一側面である。そのときこそ美への知性と感性が健やかに解放されることを期待したい。量と蕩尽の課題はその在りようへの過程の中で挑戦され遂行されると思いたい。

おおよそ以上のようなことを前提として、道具やモノの審美的属性としての造形について、インダストリアルデザイナーの立場から考察の一部を述べたい。

2．生活造形の視点

生活は、経緯はともかく結果的に造形されている。ごく限られた身辺の子細な部分からプライベートな生活の場、そして都市環境まで、タンジブル（Tangible）、スペーシャル（Spatial）、ビジュアル（Visual）の個々の断面で、あるいは多くの場合それらが複合された状態で造形されている。よくもわるくもその造形の発信源のほとんどは現在では企業であり産業である。人であるといいたいところだが企業であるというほうが説得力がある。現代の生活は大部分そういう中で営まれている。

人と他の生物との違いの一つは、人は環境や外界を対象としてもつことができるということだという指摘があるが、そこでの環境や外界は機能である以前に造形としての関係があるのではないか。J・J・ギブソンが提唱したアフォーダンス理論（Affordance Theory）によれば、行為は

環境や外界と分かちがたくむすびついており、環境や外界は人や動物の行為の可能性をアフォードしている。その行為の予見情報がアフォーダンスという概念で表現されている。仮に弁当を食おうとして箸がないのに気づいたら、ペン立ては普段とはまったく違って見える。おそらく二本の鉛筆かボールペンなどが手にとられる。そのとき手にとった鉛筆やボールペンの性質がアフォーダンスである。アフォーダンスとは行為することによって生まれる環境や対象の性質であると規定されている。そのとき造形という視点、あるいは造形の性質はどういう行為にどう関係するのか。

環境や対象物が行為をアフォードするのであれば、造形もまた行為する人たる生活者と不可分の関係にあろう。当然、アフォーダンスを積極的に意識した造形というものもあるだろうがここではそのことには深入りしない。自然環境は行為や生活との関係で人や動物と不可分であろうことは想像できないことではない。しかし、自然環境は人にとっては、不可分でありながらも明らかに対象として在り、当面の不可分は行為による関係によってあぶり出されるのではないか。アフォーダンスが普遍的なものだとすれば、とくに自然環境だけについての理論ではないので、造形の環境についてもまたおなじ関係が成り立つであろう。

見るという行為によって、触るという行為によって、空間での立ち居の行為によって、人は造形とどういう不可分の関係に抱き込まれるのか。

論理の飛躍をおそれずにいえば、美しさというのは人に特有のアフォーダンスの一つではないか。美しい自然は人をひきつけある種の興奮さえさそう。美しい街並みは人の意識を高揚させ、なにかをしないではいられないような気分にさせる。美しい車は人に乗ってみたいという衝動をおこさせる。美しい道具は人のなにかに共鳴しときに行為を喚起し、ときに知を喚起する。

自然は美しいといわれる場合が多いが、美しさは自然史的必然だとはいえない。自然には醜いと思われるものにも醜悪なものと思われるものにも事欠かない。人は自然の中の美しいと思われる部分に共鳴し、それを選びとって関係の対象にしているにすぎない。その自然が美しいのである。人の美しさを感じ取る感性は、多分、本性である以上に自然によって育まれたのであろうが、それを選びとって生活に関係づけ、さらに生活の場でそれを再現している事実は、その造形によって人のなにかがアフォードされているからであろう。

生活の場は造形の場でもある。そこにある造形は人の生活という行為に不可分である。その身辺を多様に造形しているのは人がつくりだした生産物である。その多様化はさらに広がる気配である。その複層する多様な造形物は生活という行為と場の生成に深く関わっている。

３．選択という創造

現代の生活造形は対象を選びとることによってなされている。生活を構成するもので自給できるものがほとんどない現状では当然であろう。場合によってはその選びとることさえも第三者に任せている。素材を加工するという意味での造形という行為はかならずしも欠かせない人の本性の一部ではないとはいえないのか。それとも道具やモノを作るという行為は人に必然的な属性なのか。もしそうだとすれば身辺の総てをでき合いのもので埋めつくしている現状は限りなく異常な状態といわねばならない。しかし、元初から自然は所与としてすでに生活の環境であった。そこでは作るというよりは選ぶ行為が主体であったはずである。まさにアフォーダンスである。

IT の発達が、もし人の作るという本性を解放できるのだとすれば、そのとき人は初めて本来の生活がとりもどせることになる。それはちょうどカラオケの状況と似た状態かもしれない。へた、うまいではない。とにかく歌いたいのだという欲望である。とにかく自分のものは自分で作るのだという欲望である。バーチャルであれリアルであれ、その行為をつき動かしている一つの要因は作るということの楽しさ、いわばアフォーダンスの連鎖反応のようなものだろ

う。他の一つは完成したときのやったという達成感ではないか。上手下手ではない。

しかし、それでも自作できる範囲は限られた部分にならざるを得ない。大きなもの、微細なもの、高度なもの、などは専門の生産者に任せるしかない。あるいは部品として生産されたものの中から選んで自分流に組み立てるということになる。いずれにしても生活環境の総てを自己流で押し通すことは不可能だがその組み合わせは自由である。

すでに現在がそうだが、生活環境は選ばれたものによって造形されている。カスタマイズがもっと自由になっても、オーダーメイドがもっと頻繁に行われるようになっても選び取るという行為が結果的に生活環境を造形する。それはすでに創造である。よくもわるくも独自の関係の結果であり創造である。

生産者は個々に多様を供給し、多様な使用者が固有に選びとるという図式がなりたつ。多様の供給は創造の結果だが、固有を選び、生活の場でそれらを再構成することもまた創造である。その構成に定式はない。室内も、都市環境も多様の混在の場となる。その結果については、室内はその住人が、都市環境も結局はその住民や利用者が受け入れなければならない。

写真家の篠山紀信が撮った「三島由紀夫の家」という写真集がある。それは三島自身が言っているように、レリーフや彫刻のある白いスペイン植民地風の家で、庭にはギリシャ風の大理石の人体像が立っていて、中はフランス骨董やスペイン骨董で飾り立てられている住宅のさまざまな写真である。その後付けに、「‥‥日本人は本来派手好みで、金閣寺や能楽を見ればわかるように、少なくとも室町時代までは金ピカ趣味であった。茶道が侘びだのさびだの言い出してからそれがおかしくなり、長い鎖国時代に、さびしい寒色の趣味が上品とされるようになった。けばけばしい趣味は、上は御所、下は民衆の一部だけに残るようになる。‥‥」という三島の言い分がのっている。それはいいとして、その中に書斎の写真があり、その机はなんと、多分、オカムラの初期のもので業界では旧 JIS タイプといわれる、まさに寒色グレーの大型のスティール製事務用デスクである。間に合わせとして使っていたのではなく、気にいって選んだという。写真では煙草の煙などですでに奇妙な色に変わっていたが、そのグレー系の塩ビのシート張りのデスクの上には、当時としては最新型の下側に内線ボタンがならんだアイボリー色の電話機、ピース缶、骨董らしいペーパーナイフ、モダンデザインのステンレス製のステルトンの灰皿、ナマズらしい魚型の文鎮、黒い太めの万年筆などが置いてある。さすがにその一つ一つは値のはりそうなものばかりだが、よくぞという混在ぶりである。もらったものをそのまま使っていたのかもしれないし、スティールデスクは頑丈だしそう安くはなかっただろう。しかし、室内との関係などを思うとどういう感性がこういう造形をつくりだしたのか興味がつきない。そして彼の言い分との整合性を聞いてみたい気になる。

ともあれ、選ぶ自由というのはいみじくも三島がその典型を見せてくれた。室内の家具や骨董などは夫人と現地まで行って、まさに選びとってきたものだという。そしてそれはまぎれもなく三島が選んだ造形であり、それらによって埋められた室内や場は三島が創造した造形である。

４．造形の異化と純化

ここまで、造形という視点で生活を見ること、造形の美しさは人の行為や心情に独特に関係するものだということ、人は多様で、作ろうが選びとろうがその結果としての造形も多様であること、そして、選びとること自身が、あるいはそれらによって関係づけられた造形はまぎれもなく創造とよべるものだということを述べた。

生活造形という切り口に IT の問題がどれだけどういう形で関係してくるのかは今は知る由もないが、その多様化が広がることだけは確かであろう。哲学を専門とするW・ヴエルシュは「感性の思考」という著書の中で、今後のデザインを導く基本線と

して六つほどあげているが、その一番目に、――デザインは意識的に多数のさまざまな道を歩んでいかなければならない。デザインは多元性を尊重し、それを分節化し表現することを学ばねばならない。―― ということを言っている。その言葉の裏にはデザインの当事者は近代型のデザイナーだけではなくなるのだから、そこから生まれるであろうデザインの多元性を尊重しろと言っているように聞こえる。しかもそれらを分節してあらたに表現する方法を見つけろという。原文からの判断ではないので間違っているかもしれないが、主旨は理解できる。

多様化の遠因は個々の使用者やグループが自分だけのものにこだわる傾向が強まることにあるだろうし、それを可能にする生産部分に関わりやすくなるということがあるだろう。それはまったくの個人である場合から、民族や、地域や、階層や、モードである場合までさまざまである。

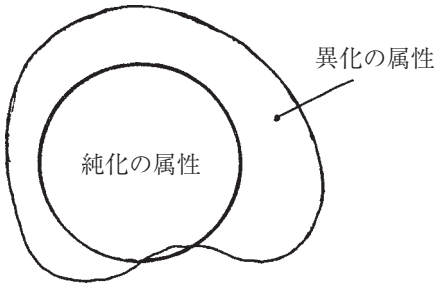
一方、都市機能を支える装置や道具は限定されたその地域での固有は可能ではあってもそれらは多くの人に共有されて使われたり、利用されたりしなければならない。また、生産財の一部や公共の交通機関などの多様化にも限度があるものもある。都市の道具が同物共有だとすれば、家電や車などの私有に属するものは同種共有と言っていい。また、機能的にユニバーサルであることが求められるさまざまな道具は、高度な次元で多様を分節しなければならない。そして経済効率という観点からだけの問題としてではではなく、ある部分は資源消費の効率化やエコロジー的課題からの要請によっても、共通化や標準化の手法も捨てるわけにはいかない。このように、現在あるいはそれ以後の造形は多様化と共通化、言葉をかえれば固有性と普遍性という問題の顕在化を認めることになろうが、美学でいうところの美はともかく、道具、あるいは生産物の造形に属性として表れる美しさには、固有と普遍を貫く基層となる属性のようなものがあるのではないか。あるいはそう設定してみてはどうか。そのことによって固有どうしがつながり、固有と普遍がつながる可能性が生まれよう。

その一つが異化という属性である。これは文字通り異なることを表象する属性である。その因子となるものは、おおよそ以下のようなものである。

・オリジナリティー
・メタファー
・アイデンティティー
・バナキュラー
・伝統
・意味はずし
・否定
・異質
・自分だけの意味
・不自然

これに対して、純化というもう一つの属性がある。それは次のようなものである。
・バランス
・調和
・均整比
・整合性
・シンプル
・シンメトリー
・リズム
・自然な
・連続する抑揚
・めりはり

一つの造形は、この異化と純化の属性を同時にもつもので、どの因子、あるいは傾きをどれだけもつかはそれぞれに異なる。少なくともこの両方の属性をもたなければ造形はなりたたない。定量的に把握できる性質のものではないので、その関係を図化するのは難しいが、イメージは以下のようなものである。



その造形に純化の属性をもたないものは単なる変わったもので、道具の造形とは言えない。CG などによる多様な造形は異化にだけ傾き純化の属性を見失ってはいないか。変わっているものは多いが美しいものが少ない。反対に純化の属性だけによる造形も可能ではあるがそれでは生活造形自身が平板なものになろう。多量に生産される同種共有の道具はもちろん、だれもが使う同物共有となる都市の道具も、異化と純化の属性を合わせもつことが必須である。そして、そういう造形が関係をもったとき、深い部分で異質がつながり、造形の状況は活性化する。

三島由紀夫ではないが、このとき造形に表れる美しさをわび、さびで表現したくなる。異化のファクターが大きく個性的である美しさを、差美と呼びたい。そして純化のファクターが多く共鳴しやすい美しさを、和美とよびたい。

人の個性の結果が振幅の範囲は限られても多様化にたどり着くことは必然である。しかし、生活造形という局面では、その多様化がカオスであっては、自分が選んで構成したとしても生活者自身が困難をきたす。まして共有される造形は和美、差美の絶妙な共存であってほしい。

5．生産と造形

現代は生が分化されている時代である。たしか10年ほど前だったと思うが、「あなたつくる人、わたし食べる人」というコマーシャルがあったが、今そのつくる人も少なくなりつつあるようである。ご飯も惣菜も買ってすますことができる。食生活だけでなく生活のさまざまな側面が細分化されている。川添登はそれを次のように書いている。――現代における基本的問題は、文明による外在化（道具や装置など）が、人間個人の諸能力、諸機能ばかりなく、家族や地域共同体の諸機能にもおよんで、生活系を分断してきたことにある。――いきおい IT がそれを修復できるとも思えない。かといって使い慣れた家電や車を今さら手放せない。

人たるゆえんは道具を作ることではない。それはすでに類人猿がマスターしている。人に特有なのは他人の道具を作ることにある。道具にかぎらず人は他人の生の営みの用の部分を意識して代行できる。そのことによってなにを失いなにを得て生の充足がどうなったかは簡単には言えない。近代産業に欲望を煽られたという見方もなり立つが、欲望を制御できる共通の規範もなかったのだから仕方がないともいえる。いまやっとエコロジー問題などによって、量やそれらの在り方への関心が共有され始めたばかりである。

川添が工業的産業による道具や装置によって個人の能力や生活系までも分断していると指摘しているように、現代の道具や装置は人の機能的部分だけを手段的に代行しているだけではない。単なる手段的存在に終われないところに根源的な意味がある。車や家電は単なる手段か。家は、衣服はどうか。そしてそれらが折り重なっている生活の場は。そうやってつきつめていくと身辺は手段と方便の堆積以外のなにものでもなくなってしまう。そうではあるまい。その総てが手段であると同時に生活の行為と場の連綿の一部であろう。生活とはその総体をいうのではないか。

それらの道具や装置を手段域から生活域、あるいは情感に関わったり情景を構成したりする目的域にまで押し動かすのが、美という目的域に関わりをもつ造形というものではないか。生はそのときどきの断面が目的的である。その部分部分をないがしろにして他になにかがあるわけではない。生活の場の造形こそ生の全体を回復できるよりどころではないか。そのことに貢献するはずの当の生産物が、ときどきの生活の行為にそぐわず、生活造形に資する能力をもっていないことが問題とされるべきである。

道具などの生産物は、企業では経済の手段となり、生活の場では生を支える。それが現代の営みの実態である。その結果が身辺を造形し、都市環境を造形している。その実態に欠陥がないとは言えない。家庭の生活の場は美しいだろうか。地域の街並みは気分を高揚させるだろうか。さらに、エ

コロジー問題、多様化への対応、共有の場の問題、などがある。そして、それらは限られた領域内だけでは改革できない。制度、行政、市民運動、産業界、テクノロジーなど、より大きな現実的領域からのアプローチが必要である。

ともあれ生産が現代の生活の場の造形に深く関わっている。人は、かって自然の中から美を感じとりその感性を育んだように、いま、そのいくばくかは現代の生産物によって美への意識を内在化している。そしてそれは次の時代の感性につながっている。

6．おわりに

近代化は工業的産業化とおなじ意味を表し、いまそれは情報化という意味に置き換わりつつある。しかしそれさえもテクノロジーと工業的産業なしには実現しなかったものである。それらがいまIT革命として消費と生産の関係自身を変えようとしている。その変化の早さは予想以上に早いかもしれない。「平成12年版経済白書」によれば、電子レンジが25%から40%普及するのに4年以上かかっているのに、インターネットが25%だったのは1999年でその後4年でほぼ90%普及するという。その結果、一人一人は膨大な情報とさまざまな可能性の前に立たされることになる。その可能性や関係を人はどうやって選びとるのであろうか。

そういう社会の実態について、西垣通はつぎのように予想している。―― 従来の共同体から放逐され、個に分断された一般庶民は、むしろ情念的・感情的な傾向を強めるだろう。（中略）一貫した客観的論理に重きが置かれるのは印刷書物にもとづく近代文明の特徴だが、大量のデジタル・イメージ情報にもとづく近未来文明では、思考そのものが断片化して浮遊していく。――多分バーチャルな領域の中ではそうなるのかもしれないが、かといって現実世界がなくなるわけではあるまい。生活の場も都市環境もそのリアルな側面はほとんど変わらないであろう。

アフォーダンスの佐々木正人は談話の中で次のようなことを言っている。――いま、アフォーダンスが注目されているのは、わかりやすい説明を喜ぶのではなく、見て、聞いて、ふれて、知っていることをお互いに認め合う方向、リアリズムへの転換があると思う。ソムリエがワインを味わい、大工さんが木の性質を知るといった認知のシステムは非常に深い。物自体のすごさへの憧れも強まっている。複雑系の時代が来たのではなくて、何かの時代が終わった。ぼくにいわせればリアルの時代が始まった。――人自身が変わらない以上これも事実であろう。生の全体性はリアルな実体に即している。なによりもかつては自然が圧倒的な現実として人の生に関わっていた。

道具や装置などの生産物による環境は、自然 ― 道具 ― バーチャル、とちょうど自然とバーチャルな領域との中間に位置しているように思われる。その生産もいま人の手から離れつつある。そして生産された後はまぎれもなく生の場を埋めつくす。その造形が自然からの借り物ではない時代になってすでに久しい。道具や装置は配慮をこめた知的感性による抽象のフォルムである。それは感性とテクノロジーが彫琢した新しい美でもあった。

生産の自由度が進んでも、道具の多様化が深化しても、人と現実体との関係は知覚と行為によって不可分である。機能は手段であっても美は目的である。その様相が多様であっても、結果的にその造形が美の宇宙に漂っていなければテクノロジーも空しい。本文は、結果としての生活造形と、その供給の当事者である生産造形の両面から、そこに関わる美の属性について考察を試みたものである。

参考文献

1．テリー・イーグルトン（Terry Eagleton）著　鈴木聡他訳　紀伊國屋書店刊「美のイデオロギー」
2．W・ヴェルシュ（W. Welsch）著　小林信之訳　勁草書房刊「感性の思考」
3．佐々木正人著　岩波書店刊「アフォーダンス－新しい認知の理論」
4．川添登編著　光生館刊「生活学講座２　生活の方法」
5．佐倉統著　岩波書店刊「現代思想としての環境問題」
6．西垣通著　中央公論　2000年１月号掲載「IT革命後の社会」
7．経済企画庁編「平成12年版経済白書」
8．篠山紀信著　美術出版社刊「三島由紀夫の家」